広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	隠喩と意味変化〈特集 比喩表現〉
Author(s)	山本, 美代子
Citation	広大言語 , 8 : 25 - 29
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046289
Right	
Relation	

隠喩と意味変化

山　本　美代子

隠喩は単に修辞学の一技巧ではなくて，本質的に言葉の成立と発展に密接な関係をもっている。

人は，認識の為に，あるいは表現の為に，こまかく一つの概念に一つの名前を与える。即ち，人は事物に命名するのである。言語がその認識及び表現という二重の機能を確保しているのは，命名のおかげである。そこで，一事物がまだ名前をもっていない場合，又，それまでもっていた名前がよくその機能を保証していないという場合，その事物に名前を与えるとすると，それは認識的命名である。事物をある特定の角度から表示するような名前を人が創作するとすれば，それは表現的命名である。

1° ≪認識的命名≫の1つの方法は，意味の変化である。二つの事物が，連合づけられている場合，その一方の事物に流用するのである。それは隠喩においては，事物の相似による連合であり，提喩や換喩においては，隣接による連合である。通俗的命名といわれている定石的な例の一つが，隠喩である。植物，動物，道具などは，その名前を交換し合っている。例えば，海には，鰡馬（mulet，ぼら），犬（chien，chien—dauphin で，あおざめ），アネモネ（anémone，anémone de mor で，いそぎんちゃく），星（étoile，étoile de mer で，ひとで）がいるし，庭には，おおかみの口（gueule-de-loup，きんぎょ草），ひばりの足（pied-d'alouette，ちどり草），雪だるま（boule-de-neige，肝木）があり，作業場には，召使い（valet，板押え金具），山羊（chévre，三角起重機），鹿の足（pied-de-biche，くぎ抜き），つばめの尾（queue-d'aronde，ありほぞ）がある。この種の認識的隠喩には，擬人化されたものが多い。橋の頭（la tête de pont，橋頭堡），山の足（la pied d'une montagne，山のふもと），のこぎりの歯（les dents d'une scie），河の口（la bouche d'un fleuve），巻き揚げ機械の腕（le bras d'un treuil），綱の接ぎ目（l'œil d'une épissure）などがある。

認識的隠喩はまた，具体的な対象や過程に連合づけられている抽象概念の命名にも，重要な役割を果す。〔penser（考える）〕はラテン語の測る（pensare）から来ている。〔ésprit（精神）〕は息（spiritus）であり〔comprendre（理解する）〕は諸関係の一体系に包括することであり，総括してとらえることである（comprehendere）など。

2° ≪表現的命名≫は，事物を話し手との関連において表示し，語り手が，その事物に帰する情

意的，願望的，審美的，道徳的な価値を表現する。対象を識別するだけでなく，さらに，意味を色どっている概念外の諸価値をも表現する。この型の命名のおもな源泉は，美的又は道徳的な価値づけである。そのあるものは，「mon chau 私のキャベツ，愛称の呼びかけ」「mon chat」私の猫，愛称の呼びかけ」「une vache 牡牛（俗）だらしのない女」「un chameau ラクダ（俗）ならず者」「une oie ガチョウ（俗）ばかもの」「un âne ろば（俗）まぬけ」などの様に，隠喩によるものである。

一つの語にはそれぞれ次の四つの型の連合が認められる。

意味論的	文体論的
基本的意味	表現的価値
文脈的意味	社会・文脈的価値

この四角形は一つの語を表わし，四つの仕切りのそれぞれが一つの特殊な連合を表わしている。「ビフテキ政策（オペラシオン）が進行中である」という場合，「opération」という語は次の様なものを喚起している。

1° 基本的意味：特定の目的の為の順序だった一連の仕事。

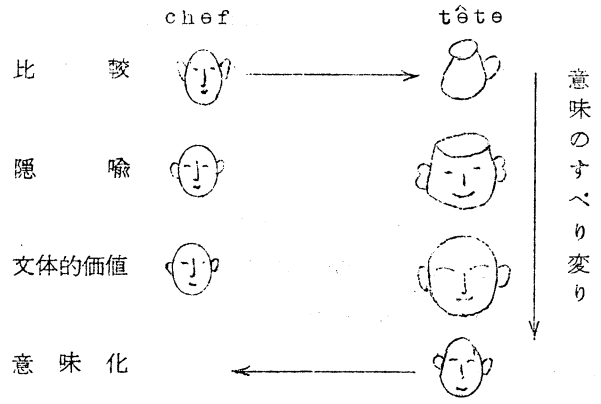
2° 文脈的意味：特定の経済的集団に対する行政上の操作。

3° 社会文脈的価値：この文例は軍事的な作戦や声明を暗示している。

4° そこから表現的価値が出てくる。すなわち，きわめて組織だった，断固たる，そして徹底的にやりとおす決意をもったある政策（オペラシオン）という観念，またその意味が現実に対して適切でないことと，およそ考えられない様な opératoon の誇張された価値とに由来するコミックで諷刺的な効果である。個人によって，また情勢に応じて，語の内部では，これらのさまざまの連合の間に不断の交換がおこなわれる。三つの副次的連合の機能は，基本的意味を正確にし，いろどることであるが，またこれら三つが発展していって，基本的意味をゆがめ，抑えつけ，完全に入れ替ってしまうことさえある。これは，意味のすべり変りをいう問題である。例えば，tête についてみてみよう。

「Tête（頭）」の語源は，頭（始めは「chef」と呼ばれていた。）から「土のつぼ」（ラテン語で testa）へという連合による文体的な隠喩である。これはあらゆる言語に見出されるようなコミックで諷刺的な意図をもった通俗的隠喩だ。たとえば現代フランス語の「citron（レモン，俗語で頭）」，「Patate（サツマイモ，俗語で土百姓）」「cafetière（コーヒー沸し，

俗語で頭）」などを見ればよい。そして次の図式のように，連合の関連がすべり変る：



――最初に比較，すなわち二つの自律的な映像の連合。つぼのそばに頭を並べると，その chef（頭）が，つぼ（tête）に似ているという連合である。

――続いて隠喩，つまり二つの映像の二重映し。つぼの中に頭が記入される。chef がすなわちつぼなのだ。

――次いで，文体的な価値。つぼの映像は消え去り，何かこっけいな不体裁なもの，丸くてごつごつした chef との漠然とした連合だけが残っている。

――最後には，語が意味化される。表現的な反映は薄れていく。語〔tête〕が一つの純粋な概念〔頭〕を表示し〔chef〕にとって替る。このようにして，語はひとたび創作されてしまった後では，その意味は，自発的に進化していく。

こういった意味変化の論理的形態は，古来，修辞学の一部門として研究されてきた。転義法の理論がそれであり，ラテン文法学者は，それに次の１４種を列挙している。隠喩，提喩，換喩，換称，濫喩，擬音，転喩，通称，寓喩，謎，及び迂説法，転置法，誇張法の三つに分れる反語法である。中世期，および古典主義期の修辞学を通じて現代まで生き残ってはいるが，定義，分類，術語法は常に不安定であった。

ダルメステテールやブレアルのような初期の意味論学者は，隠喩，提喩，換喩をもって意味の変化の基本的な型とみなしている。しかし，意味論的な分析の発展により，かっての分類が認識論的には，余り価値がないということが明らかになり，他の分類法が持ち出されなければならなかったのである。ヴント，シュールト，そして特にＦ，ド．ソシュールが出現して記号学的な標識に立脚した意味の変化の理論が見出された。ヴントは，この過程の心理，連合的な本性や相似及び隣接とい

う連合の二つの大きな型を重視し，名前の移転と比喩，すなわち意味の移転とを区別している。シュハルトも又ソシュールも，名前の研究と，意味の研究とを対立させている。ソシュールは，次の様に言っている。「時と共になされる変質はさまざまの形態をとるが，それらの形態のどれ一つでも，言語学の著作の重要な一章の内容をみたすに足りるだろうものである。こまかい部分には，立ち入らないとしても，以下重要な点を解明しておく。まず第一に，変質という語に与えられている意味をとりちがえてはいけない。この語から人は，特に能記がこうむる音韻的変化か，さもなければ所記の概念を襲う意味の変化が問題である，と，思い込むかもしれない。この考え方は，不十分である。変質の諸因子が何があっても，またそれらが単独で作用するにせよ，合同して作用するにせよ，それらは結局，能記と所記との間の関連を移動させる。」(Cours de liuguistique générale P.109，小林訳「原論」P.101)

以後，この定義は，主な学説すべてに，採用されることになる。その中から，代表的なものとして，ウルマンの分類を簡単にあげておく。ウルマンも，ヌテルンと同じように，歴史的な起源をもつ言語外の変化を，言語の保守的本能によるものであるとして，切り離して分類してから，彼は，次のように確信している。すなわち，名前の移転と，意味の移転とがありうるが，そのどちらの場合も，名前や意味の，相似，あるいは隣接による移転である，と。そして最後の一組には，複合的連合によるいろいろの混合変化がまとめられる。ここから，次の図式が導き出される；

A） 言語的保守主義による変化

B） 言語的改新による変化

Ⅰ 名前の移転；

a） 意味の間の相似によるもの

b） 意味の間の隣接によるもの

Ⅱ 意味の移転；

a） 名前の間の相似によるもの

b） 名前の間の隣接によるもの

Ⅲ 混合変化：

	a 相似	b 隣接
Ⅰ 意味	Ⅰa	Ⅰb
Ⅱ 名前	Ⅱa	Ⅱb

Ⅰa 意味の相似による名前の移転。――これは，あらゆる意味の変化のうちで，もっとも頻繁

なものであり，隠喩やそれと関係ある言葉のあやとか比喩表現は，ここに含まれる。

意味の相似には，次のようなものがありうる。

(i) 実体的：une feuille d'arbre〔木の一葉〕と une feuille de papier〔紙一枚〕との間の形態的な相似，又，先にあげた机の脚，山裾，河口，橋頭堡，針の目，その他多くの擬人的移転は，ここにあげられる。又，機能的な状況的な相似，etc.

(ii) 共感覚的：ある音からある色へ，ある色からあるにおいへというような同化。

(iii) 情意的：「熱い友情」や「やわらかい性格」などのように，ある感情が，ある具体的な対象物に同化され，その諸性質に帰属させられる場合。

移転は，直接的なこともあるし，又類推によって引き継がれることもある。

Ⅰb ―― 意味の隣接による名前の移転　提喩と換喩はこれに属する。二つの意味の隣接には，空間的なもの，時間的なもの，あるいは因果的なものがあることもある。

Ⅱa ―― 名前の相似による意味の移転 ―― 音韻的な伝染，及び通俗語源がある。

Ⅱb ―― 名前の隣接による意味の移転 ―― 同一文脈の中で隣接している二つの名前の間の連合から，省略や統辞的な伝染が生れる。

Ⅲ ―― 混合移転 ―― 移転の機構は，必ずしも，この様に単純ではない。そして，これまでの例として挙げた中にも，又，大部分の変化は，複合的な諸関係に基づいたものであり，又，その境界も必ずしも，容易に区切りうるものではない。

ウルマンは次の様に述べている。……２０００年以上にもわたって，意味論的と，修辞的文体論的規準は解け難く，織り合わされ，混乱は，いまでも多い。それでも，分界線は，極めて明らかである。意味の相似に基づく移転は，隠喩やその同類をその一種とする意味論的な類概念である。これらをこの類のほかの異種から区別する種差は，それらが美的目的に適う意識的で意図的な移転であるということである。（意味論・山口秀夫訳　Ｐ228）

*　　*　　*　　*

以上，私自身わからない事が多くてうまくまとまらないのですが，意味変化を中心に，言語の成立，発展における隠喩の役割をごく簡単にまとめてきたつもりです。

≪参　考≫

意味論　ことばの意味　ピエール・ギロー　佐藤信夫訳　（白水社　文庫クセジュ）